

福島での支援に軸足

ニーズ把握や情報収集へ

理ム
処シア
きー
れン
がコ

震災がれきと産業副産物のアロケーション最適化コンソーシアム(がれき処理コンソーシアム、代表・久田真東北大学教授)は14日、第6回全体会議を福島ヒューホテル(福島市)で開き、部会での検討状況などを報告した。写真。環境省

福島環境再生事務所による除染などの現状報告も行われた。同コンソーシアムは、福島での支援に活動の軸足を移していく方針で、久田代表は「一筋縄ではいかないところもあるが、福島の事情をしっかりと踏まえて議論し、復興に向けて活動していきたい」と語った。がれき活用検討部会は、関係機関との意見交



福島県環境再生事務所のアロケーション最適化コンソーシアム 第6回全体会議

換を進めており、福島県での復興に向けた資材利用ニーズの把握や、福島県内の除染などの処理状況などさらなる情報収集が必要という状況を説明した。未利用資源有効利用検討部会では、▽石炭灰▽銅スラグ、フェロニッケルスラグ、転炉系製鋼スラグ▽ペーパースラッグ▽溶融スラグの資源ごとにワーキンググループ(WG)を設置した。資源ごとに議論を進めており、来月に部会として第3回全体会議を開く予定という。

話題提供として、国立環境研究所の山田一夫資源循環・廃棄物研究センター主任研究員が、放射性物質で汚染された焼却飛灰廃棄物などの最終処分場(指定廃棄物最終処分場)へのコンクリート技術適用に関する検討状況を紹介した。鉄筋コンクリートは完全な水密性の実現が困難なことから、万が一のトラブルが生じた場合でも、直ちに機能喪失しないように、より安全性を高める設計が必要との考えを示した。フライアッシュを利用してASR(アルカリシリカ反応)膨張を抑制するといった対応にも言及した。検討成果は、今月30日に技術資料として提示される予定。

同日の会合では、フライアッシュの活用への期待感が示された一方で、JISに適合したフライアッシュの生産が容易ではなく性状にはらつきがあるといった課題があることも報告された。